



## 女言葉という嘘

おんなことば うそ

清水義範  
しみずよしのり

「外国人は肩凝りしないんだってきいたことがあるけど、あれって本当なのかな」

というセリフを小説の中に書いて、編集者に直しを求められたことがある。編集者の言い分はこうだ。

「前後を読むと、あの発言は主人公の妻のものですよね。なのに、男言葉なので、夫の発言なのかと錯覚してしまい、夫と妻のどっちがしゃべっているのかわからなくなるんです」

日本語の困った点である。つまり編集者は、女性のセリフならば「あれって本当なのかしら」と書いてもらわなければ困る、と言っているのだ。

日本語にはそんなふうに、男言葉と女言葉がある。そのせいで便利だということもあるが、不便なこともある。だが、そういう男女の言葉の差は、最近どんどん薄れてきている。近頃の若い女性は、「はらへって、めし食うとうめえせ」と言っているのだ。それを昔の女性は「おなががすいて、ごはんを食べるとおいしいわ」と言っていた。そんなふうに男女の言葉に差があまりなくなってきたのは、私は基本的にはいいことだと思っている。女性用に別の言葉があるというのはや

はりジェンダーなのだから。

たとえば私の妻が、冒頭のセリフを他人に言う時は、「あれって本当なんでしょうか」とか「あれって本当なのかしら」と言う。だが、同じことを夫である私に言う時は、「あれって本当なのかな」である。

その小説のその場面は、夫婦が会話をしているシーンだったから、私はリアリティーのほうを重んじて「あれって本当なのかな」と書いたのである。ところが、編集者からクレームがついたのだ。そしてその編集者というのが、若い女性であった、というところにこの問題の根深さがある。

多くの女性がマスコミにインタビューを受けて発言している。そしてたとえば「政治家が無能なんですよ」と言うこともあるだろう。ところがその発言が雑誌や新聞に載ると、「政治家が無能なんですわよ」と変えられているのだ。みんな、ムカムカしているんじゃないだろうか。

リアルを見ずに、記号としての女言葉を使ってしまいうのは、言葉のプロとしては情けないことだと思うのだが。だが今のところ私は、クレームをつけられると、わかりにくいですが、と言って女言葉に直している。そしてどうも釈然としない気分になる。

(小説家)  
しょうせつつか